

弟子の上山に憶う

神田英俊

「右二月三日付掛搭志願の儀許可する、依つて三月十一日に威儀を具し此の許可書持参し・・・上山すべし」ご本山からの許可状が届く。いよいよ弟子にもその時が来たのかと思うと三十年前、私自身が上山した時のことが思い出されます。

昭和五十年春に安居し、何もわからぬままとまどうことばかりで、時に古参の鉄槌を受けることもあった。今にして思えば当然のことであるが、自分の納得がゆくまでお山に残るうと決意、一祖さまの七百回大遠忌を勤めその後送行した。その間、多くの法友と出会い、諸役をいただき、様々な経験をさせていただいた。どのような配役であつても軽んじてはならないことであるが、特に九旬禁足、制中の書記は第一座を補佐し、修行中の範となる重要なお役であつた。なかでも、首座寮三名で務める上回り振司は印象深い。まだ大衆が寝静まつているうちに起床、威儀を整え、仏殿横の階段下で待つ。山々も七堂伽藍も私も、静寂の中にすっぽり包まれていると、道元禅師さまが詠まれた「峰の色 溪の響きも 皆ながら 我が釈迦牟尼の 声と姿と」の道歌のままに、今にもお釈迦さまが道元禅師さまが現れて来そうな錯覚に陥ること度々であつた。

また、当時の後堂職、檜崎一光老師は幾た

びかの御提唱にて安居の意義、弁道とは、を切々とお示しくだされた。衣食住の三如法を説かれ、特に袈裟を頂く時の老師のお姿は忘れられない。雲水の持ち物は三衣一鉢、三衣とは、五条、七条、九条のお袈裟のことで、老師は「小三衣」を常に持参し、お内仏に祀り、朝課後の看経はそのお袈裟に礼拝をなさつていた。「袈裟は是れ釈迦牟尼仏皮肉骨髓也」そのお言葉の如く、お袈裟の信仰、丁寧な扱い方には深い感銘を受けた。

『正法眼蔵袈裟功德』の巻の終わりに「予在宋のそのかみ、長連牀に功夫せしとき、齊肩の隣単をみるに、開静のときごとに、袈裟をささげて頂上に安じ、合掌恭敬し一偈を黙誦す、その偈にいはいはく、「大哉解脱服、無相福田衣、披奉如来教、広度諸衆生」ときに予未曾見のおもひを生じ、歡喜身にあまり、感涙ひそかに衣襟をひたす」と。道元禅師さまは天童山で初めて目の当たりにした隣単の僧に見るお袈裟の扱いに涙がながれるほど感激したとある。この度上山した弟子の袈裟行李にはお袈裟、竜天軸、涅槃金の他に、家内の縫つた小三衣も納め持たせた。

弟子は駒大に入る前に附属岩見沢高校仏教専修科に学び、札幌中央寺、釧路定光寺での特殊安居の経験がある。わずか二週間の安居が三回であつたが、きちんと剃髪し如法の威儀で上山した。おかげで心量器の

扱い、法衣の作法、法要進退等も一応は習得できたのではないかと思う。さらに仏専の意義、絡子を縫うということまで教わっている。師匠と弟子ではあるが、親と子の関係でもあるがゆえに一般寺院においてはなかなか全部を教えることは難しいもので、少しでも仏道を学んでもらいたいという願いから三人の弟子たちはみな仏専に進ませた。将来は宗門を担ってくれる僧侶となつてほしいものである。仏専は誠に貴重な宗門徒弟教育機関であると思つた。

小さい頃から「縁あつてお寺に生まれ、他の人よりも直に、よりたくさん仏の教えを学ぶことができるのだから、このご縁を大切に、しっかりと歩を進めなさい」といつも言い聞かせてきた。

「霧の中を行けば、おぼえず衣しめる」霧の中を歩いていくと、いつの間にか衣がしつとりと濡れてくる。いま幸いにも道元禅師さまの開かれたお山、永平寺で修行ができること、仏法の真只中で、大勢の修行者と一緒に弁道精進できることは何にも増して有り有り難いこと、知らず知らずうちに仏法が身についてくれることだろうと思つている。

この度の安居には同名の方が先におられるということと弟子の呼び名は「全提」ということになった。以前に現賞首の宮崎禅師さまから頂戴した号であります。黙々